Rotary Rotary International District 2500

2022.10.6（木）
第13回例会
（通算3682回）

2022-2023 年度
釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン『創り出そう身近な奉仕を　友情、愛情　そして熱意で』

2022-2023 年度
国際ロータリーテーマ
イマジン ロータリ

2022-2023 年度
RI会長 ジェニファー・ジョーンズ
第 2500 地区ガバナー
久木 佐知子（旭川西 RC）

第85代会長　滝越　康雄
副　会　長　清水　輝彦
幹　　事　中島　政徳
編集責任者　クラブ会報・雑誌委員会

例会日　毎週木曜日 12:30 ～ 13:30　夜間例会 18:00
例会場　釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局　釧路市錦町 5-3 三ッ輪ビル 2F
0154-24-0860　0154-24-0411

月間テーマ	経済と地域社会の発展月間
本日のプログラム	職場訪問例会「本行寺の歴史と有形文化財登録にむけて」(担当：職業奉仕委員会)
次週例会	地区大会報告会 (担当：理事会)

■ロータリーソング：奉仕の理想　　■ソングリーダー：小野　正晴君
■会員数　104 名
■ビジター　なし
■ゲスト　京都華頂大学現代家政学研究所教授　川島　智生様

会長の時間　滝越　康雄会長

こんにちは。今日は、会場のムードから何となく法事法要の例会になっています。本日は幹事が時間制限で３分間・秒数で 180 秒と、目の前に砂時計を置いておりますので手短に行います。

本日は米町が例会場でして、昭和・鳥取方面から、また釧路町からは多少距離があったものと思っております。忙しい時に会合にお越しいただきましたメンバーの皆さま、ありがとうございます。

本日のプログラムの講師の方は、先ほどご紹介させていただきましたけれど、遠路はるばる京都からお越しいただき、時間を割いていただきました。ご協力、誠にありがとうございます。

この例会は、実をいいますと前年度杉村パスト会長の時の企画でございまして、コロナの影響で実現ができずに、本日の開催となりました。美味しいところをいただきまして申し訳ございません。杉村年度のスタッフの方にお礼を申し上げます。

今回の会場のご提供と、講師の仲介では菅原住職にお礼を申し上げます。

最後に、職業奉仕委員会・曽我部委員長を中心に、かなりお手伝いいただいたと思いますので、本当に感謝いたします。

今日は時間制限がありますので会長挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。失礼いたします。

■本日のプログラム■
職場訪問例会「本行寺の歴史と有形文化財登録にむけて」

職業奉仕委員会　曽我部元親委員長

皆さん、改めまして本日の例会に参加いただき誠にありがとうございます。そして本日の例会を快く引き受けてくださいました菅原住職様と川島先生には、心からお礼申し上げたいと思います。

先ほど滝越会長からも本日の例会は杉村年度に企画されたものと聞きました。私は昨年の７月に入会をさせていただいきましたから、昨年の企画とは知らなかったのです。ただ、今年に入ってから「本行寺さんが国の文化財に、という動きがある」という新聞記事を拝見しました。それで「本行寺さんはどうか」という話になり、「実は昨年の予定だった」ということでしたので、リベンジというわけではございませんが今回の企画になりました。

このお話をした時、偶然にも「川島先生が、５日に釧路に来る予定」でしたので、講義もしていただけることになりまして、素晴らしいものになったのではないかと考えております。
昨日お話をさせていただきましたけれども、本当に素晴らしい内容で、多分 30 分では足りないと思いますが、ご講演を賜りたいと思っております。
本日のこの講演を契機に文化財登録に向けて、会員の皆さまもしっかりと拝聴をお願いいたします。それでは、よろしくお願いいたします。

宗教法人本行寺　菅原　顯史住職

皆さん、こんにちは。改めまして、今日はよろしくお願いいたします。
皆さんには菩提寺にお参りをされることがあるかと思いますけれども、他のお寺さんに入ることはないと思うので、皆さんは本行寺へいらして「浄土真宗のお寺とはこのような雰囲気」というような体感をして味わっていただければと思っております。今日はこれから川島先生にこの本行寺の本堂と納骨堂についてお話を頂戴できればと思っております。
　先ほどからお話がありましたとおり、昨年から本行寺で職業例会をするということになっておりました。今回、釧路市の文化財担当者の方にこの本堂についての説明をするということで、京都から川島先生に昨日いらしていただきまして夕方、博物館の関係者の皆さんと今後のことについての打ち合わせをさせていただきました。今日はそのあたりも先生にお話を伺いたいと思っております。
今日また嬉しいことは、皆さんとこのようにお会いする時に私はスーツとか、街でお会いする時は私服のチャラチャラした感じですけれども、実際にきちんと仕事をしているところを皆さんに分かっていただけて、今回は良い機会を与えていただきましてありがとうございます。
それでは、本行寺の歴史について最初に触れておきたいと思います。
本行寺は、明治 18 年にこの地で布教が始まったと言われております。最初に亡くなられた方の過去帳の記述が残っておりますので明治 19 年が開経、ここでお寺が始まったと言われる年です。明治 22 年には、浄土真宗本願寺派の本山の教務所となりました。そして明治 31 年には『本行寺』というお寺になりました。
その当時の住職の名前が伊藤浄栄さんでして、本山京都から派遣された方で、秋田出身の方でした。
明治 33 年にこの本堂の前の本堂が建立されました。
これがその本堂の写真です。明治 41 年には大乗教という経典を購入しました。これは現在でも残っております。
明治 44 年に大工組合さんによる聖徳太子講が結成されました。いま現在は釧路建築協会の皆さまが管理をされております。皆さんは駐車場に入られて左手の建物をご覧になられていますが、そこで毎月例会を行っております。８月には盆踊りをして、建築協会の皆さまだけではなく左官の皆さまや板金の皆さまが集まってのお祭りを開催しております。
これは、当時の本山の教務所になったその証がここに書いてあります。ここには米町の各お寺さんの開経の年度が載っています。法華寺さんが一番古く明治 13 年、隣のお東の聞名寺さんが明治 14 年、今日住職さんがいらっしゃっています大成寺さんが明治 17 年、そして定光寺さんが明治 19 年、ウチが明治 31 年、西端寺さんが明治 32 年、と各お寺の開教、お寺になった年度がここに記載されております。明治の頃にほとんどのお寺ができているということです。
　明治 45 年に現在、境内にある太子堂が落成しております。この時に私の三代前に菅原覚月が大分県から住職として赴任しております。
いまの本堂は大正 11 年に工事が着手されて、上棟式です。このことは先生が詳しくお話しいただけるかと思います。
　第四代住職、菅原覚也ご住職は、皆さまもご縁の深い釧路湖陵高校の歌詞を書いていまして、子どもたちを集めてのこのような日曜学校などの催しをお寺で行ったりしております。
　この写真は、お釈迦様の誕生を祝いする第 1 回花まつり。本行寺を会場にして行われました。
これはその当時の本願寺ご門主様がいらっしゃった時の様子で、皆さまが本堂を埋め尽くすほどお参りをされております。このご門主様は軍人法主と言われておりまして、その当時、戦争を啓蒙するという意味で各地を回られていたということです。
このようなことで、本行寺の歴史は時間がないので割愛しておりますけれども、様々な行事を行い、本堂を改築して、私は平成 28 年に第七代目の住職に就任しています。
平成 29 年に開経 130 年、寺号公称 120 年の記念法要を行いまして、その時に五木寛之さんにご講演をいただきました。
本行寺の歴史はザッとお話させていただきましたけれども、今日の肝心なところは第二代目の本堂の文化的価値について先生にお話しをいただくところでございます。
先生、よろしくお願いいたします。

京都華頂大学現代家政学研究所教授

川島　智生様

川島です。今日はよろしくお願いします。最初に私の自己紹介をいたします。この分野で25年前に博士号を取っており、いま60代の半ばです。研究歴は40年ぐらいで、日々古い建築を研究しています。例えば釧路に関係ある建物ですと、釧路が生んだ建築界の鬼才の毛綱毅曠とたまたま縁があり、いまから40年前にお付き合いがありました。彼がまだ神戸にいる時、私が住んでいるすぐ近くの場所で、私はまだ20歳ちょっとだったのですが、彼の展覧会があって、何度か居酒屋で酒を呑ませていただいたことがありました。その関係で35年ぐらい前に『反住器』という、今では立ち入りが厳しくなっている現代建築を尋ねて、お母さんと会った記憶があります。
ということで釧路の街はこの40年間ぐらいの間に5回～6回は来ています。小学校6年生の時、50数年前にも来ておりますけれども、わりと縁がある街です。
このような古い建築を文化財にする仕事も、20数年手がけておりまして、今までに登録文化財は20件ほど私が責任者になって行いました。2カ月前に神戸の『帝国信栄』という古い大正時代のビルディングの建物を登録文化財にしました。昨年度は、高島屋の本社は東京ではなく実は大阪なのですが、大阪にある高島屋の東別館を15年かけて国の重要文化財にしました。いまは松坂屋百貨店の大阪店ですけれども、日本で最も華麗なスタイルがそのまま残っている建物です。ということで、わりと全国各地で、東京でも10年近く前に神社を文化財にするのに関わっております。
たまたま私は2年前に、ここの住職にこの建物の中を案内してもらった時にびっくりしました。建築学的にこれまでにないようなものがここにありました。建築の学者の世界でも、ほとんど知られていませんので驚いていろいろ聞いてみたら、調べれば調べるほど新しい画期的な試みがなされていてびっくりしました。
昨年から、調査依頼を受けて、夏に何人かのチームを組みました。工学博士で一級建築士の友人たちを呼んで一緒に、皆さんの上にある屋根裏を、あるいはこの下の床下の調査を5日間行って、ある程度いろいろなことが分かりました。同時にこのお寺が持っている古い書類、図面を細かくチェックしました。すると、いろいろなことが分かってきました。
（建物のスライドを見せながら説明）
ここで見ていただきたいのは、このような同じような形の屋根が2つあること。それからこの壁の様子です。釧路の、この界隈には6つの寺院があって、他の寺院は、ここ20年～30年で鉄筋に建て代わったものを除いたら、やはり普通の伝統的なスタイルです。ところが、ここは100年近く前なのに、普通の仏教寺院とは見えない形になっています。そこなのです、ミソの部分は。もう少し見ていきましょう。
多分このシーンが一番よく分かると思います。このように出っ張っている所は建築では専門的には『車寄せ』と呼んでいて、昔の役所や学校によくあるものです。ところが寺の場合は、ここは車寄せと呼ばずに『向拝』と呼んでいます。普通は、上から屋根がストンときているのですが、ここはこのように飛び出ていて、そこが少し変わっています。それから、ここに装飾がたくさん付いています。普通のお寺ではこの装飾は全部木で作っています。ところが釧路は、海霧や寒さなどで、木で作るとだいたい20年～30年しか持たない。ここはセメントで作っています。分かりやすく言うと、モルタルやコンクリートなど左官彫刻で作っています。その点も優れているわけです。
もう少し見ていきましょう。これはアップしたものです。これは正面に向かって右側です。これは左側ですけれど『あうん』になっています。口が閉じているのと開いているので分かると思います。ゾウがいます。これは獅子ですけれども、こういう組物と呼ばれて『斗栱』と言いますけれども、このようなものも木ではなく全部セメント系のもので作っています。
これは納骨堂です。この建物は大正15年にできていて、その6年後にこの納骨堂ができていて、これは今の姿です。ここは、30年前に大改修しました。納骨堂は新しいものが裏にできていたので、いまもそのままになっています。いまは物置ですけれど、ここから何が言えるかというと、この外壁の表面のザラッとしたモルタルの感じが元々の本堂にあったものと同じなのです。
このような所にアーチがある。普通のお寺ではこのようなものはありません。しかもこれは玄関の少し飛び出た部分がこのような入母屋造の屋根の破風があって、さらにこちらにも破風がついている。このように破風が二段あるのは本堂と全く一緒の形です。
本堂は、完成したのが大正15年、あと4年で100年になります。ところが、工事が始まったのは大正11年ですからちょうど100年前の春です。その間に結構時間がかかっているわけです。それからこの計画ができたのが大正9年です。太子堂はその時に場所が変わっています。工事費は全体で25万円。いまのお金で25億円ぐらいの金額です。
当時の25万円はどれくらいかと言うと、北海道内にあるお寺でこれくらいの金額のものは、いま国の重要文化財になっている東本願寺の函館別院、大正4年の日本で一番古い鉄筋コンクリートのお寺、そこだけです。これくらいの大規模な費用がかかったお寺はその

お寺とこのお寺しかありません。この辺りは知っておいてください。
まだ明治年間は、内地からこっちへ来て、一旗揚げて帰るといった、出稼ぎ気分です。ですから建築的に見ると建物はみんなその場しのぎの仮設建築が多いのです。お寺にしてもそうです。ところが明治40年代ぐらいの終わり頃から根を下ろす人が結構出て来て、本格建築の嵐が明治の終わりから大正時代にかけて起きます。例えば、内地の京都などに匹敵するぐらいのきちんとした建物を作ろうということが出てくるわけです。
当時の住職は、「一般の人に教化するためには、きちんとしたお寺を作って、きちんとした伽欄が必要だ」と書いていて、そういうことを最初に言い出した方です。そして実際に準備にかかるわけです。住職は、ここに来る前は、西本願寺の函館別院にお務めで、ここの責任者をしていました。
函館別院はこのような建物で、普通の人が見たらお寺とはとても思えなくて教会にしか見えません。函館は開港都市ですから、このような建物がたくさんできるわけです。しかも函館の場合は5年おきに火事が頻繁に起きて、5年おきに建物を建て替えなければいけないので、木造で造っていたら全部火事で焼けてしまうので、火事で燃えない煉瓦造りにしたわけです。函館にいた人ですから、こうした考え方があって「このような洋風のスタイルにしたい」と思ったみたいです。モデルは西本願寺函館別院です。後で図面を見ますが、ここの最初の図面は、この建物全部が石造りの建築になっています。ところが途中で変わりました。
これは、昭和8年、できて10年ぐらい経った時の姿です。いまと少し違っていて屋根も普通の瓦棒葺きという鉄板葺なのです。壁は基本的に一緒です。こっちは庫裏があった、納骨堂です。これは棟上げの様子です。
函館と同じように明治の釧路は絶えず火事があって大変でした。それで、火事に強い防火建築を作らないといけない。当時は煉瓦で全部作るとものすごくお金がかかるのです。ところが北海道では加工しやすい石がたくさん採れたので石で造ることを考えます。札幌から石を運んだのは船か鉄道かは分かりません。もう鉄道は延びていました。
実際には石では造らずに、その後に生まれた鉄網コンクリート、鉄筋コンクリートとモルタルの間の方法がここでは使われています。石は、本堂の裏側の壁一面が全部石なのです。そこだけ唯一残っています。
もうひとつの理由は、やっぱり釧路や根室、このあたりの特有な冷涼な気候による制約があったからです。木をそのままむき出しにしていると持ちません。20年～30年でダメになってしまうので石を使ったわけです。

これは、棟上げの時の写真ですけれど建物の構造は木造です。この木造の表面の裏側は石を積み上げている。表側は太い針金を芯にしたコンクリートを塗っています。
これは、屋根裏です。ちょうどこの上です。ここへ上がるとこのような感じで棟札があります。ここで見ていただきたいのは、この木の組み方です。このような木の組み方のことを専門的にはトラス構造と言いまして、昔の映画館など柱を部屋の中に持ってくることができない建物によく使われた手法で、アメリカ・イギリス・ドイツで発明された方法です。洋小屋と呼んでいます。普通のお寺や普通の住宅は和小屋と言いまして、こういう三角形の組み合わせではないのです。
三角形の組み合わせが優れているのは構造力学的に地震や台風など外からの力に三角形で組み合わさっていたらもう動かない。しかも止めている所が日本の建築はホゾと言って穴に突っ込んでいるだけです。それは地震のような大きな力だと外れたりすぐ折れたりします。ここでは鉄の金物を使っています。普通の薄い鉄板ではなくて帯状の肉が厚いフラットバーという表面が錆びても中まで錆びない厚さが5㎜や8㎜ある輸入物の鉄を使っています。このように引っ張っている物は鉄の棒です。そのように西洋から来た力学的に強いものがたくさん入っているので、真ん中に柱がないのはそういうことです。非常に頑丈にできています。
京都の本山に鑑みれば、西本願寺は昔のまま、江戸時代のままです。東本願寺は明治維新の時に火を付けられて本山が焼けて、明治の半ばに東本願寺はできています。東本願寺の建物の屋根はこうなっています。でも西本願寺の本山は江戸時代の建物で江戸時代はこのトラス構造がなかったので、和小屋という伝統的なものです。それでは弱くて、段々傾いてくるのでいろいろな補強をしています。ですから非常に頑丈な構造に屋根がなっていることをぜひ知ってください。
そこには、このような御札、棟札と言います、がありまして大工棟梁の名前などが全部記してあります。この大工棟梁はみんな、新潟の間瀬村という所から来た人たちです。
　これは総代が出ています。当時総代もやっぱり大工棟梁が入っているわけですね。
そういう大工棟梁を見て見ましょう。高等教育を受けた建築の設計者が入っているわけではなく、大工棟梁自らが設計と施工の両方を行っています。棟梁も間瀬村から来た人で、基本的に従兄弟が釧路で成功していたので来て、それから44歳で独立して、釧路の大工の組合長になって太子堂などをやっています。私もここへ来てびっくりしたことは、このような太子堂は、他の地方には全くないのです。ですからこのようなものがあるという点も特徴です。
この人も間瀬村から来た人です。

これはいまの図面ですけれども、横から見たもの。最初はこのような石造りの洋風のもの。元々はこのようなベランダがあったのです。正面ですけれどこのようなベランダが付いていたのです。なぜ急に洋風から和風に変わったかというと、釧路の裁判所が直前にできて、このような入母屋の和風だったからそれが多分影響したと思われます。

また先ほどから申し上げている函館別院、日本で一番古い鉄筋のお寺があったから影響を受けて和風になったと思います。

これは、この屋根裏の様子です。これは全部土壁で作っている明治時代の東本願寺の建物です。これは土蔵造りですけれどいまはちょっと土蔵造りぽい感じもしています。

これは、裏側の石を積んでいる札幌軟石です。これは間取りですけれど、玄関の上は吹き抜けになっています。いま、ここは部屋になっていますけれど、途中で変えました。このような所が吹き抜けとは、公会堂のような建築だったわけです。

これは、地下の部分です。地下にもこのように空気が流れる所があって煉瓦造りになっています。いま補強工事をしています。

これは彫刻ですけれど、ここはガラスの玉が入っていました。専門家に写真を見てもらいましたけれども、どうやってこのようなものを作ったのかが問題です。コテでこのような形を作り、中は木で作っています。普通の木が入っていて、その上に針金のごつい番線である程度、形を作ってその上に何回も何回もモルタルを塗っていって、厚さは多分３㎝～４㎝ぐらいある。これを叩いてみたらポコポコ言っていましたけれど、このようなものは日本でもここが唯一なのです。そのような意味でこれもとても技術的に珍しいものです。これも一緒ですね。全部左官で作っています。この辺りでは、一番古いということです。

最後に、これが言いたいことですけれど、なぜ値打ちがあるのかということは、このようなコンクリート仕上げです。普通の人が見たらモルタルに見えるけれど厚さが６㎝あります。コンクリートの建物はだいたい最低８㎝～ 12 ㎝。だから、コンクリートと普通のモルタルのちょうど間ぐらいなのです。そこが一番珍しい点です。もちろんトラス構造である点も珍しい点です。それから、いま周りにある木の柱が全部タモという地元の木で、48 本の柱が使われていて、これも日本で他に類例を見ないものです。それから、先ほどから申し上げている左官彫刻がこの建物の特徴です。他に類例を見ない、内地でも全くないのですけれども稀有な建物です。

しかも、この建物が釧路では最も古く最も大きな建物です。そのような建物が何にもなっていないことが不思議な感じがしています。釧路には登録文化財が一件しかありません。他の地方ですと、例えば関西方面で普通の街でも人口が 10 万人位であれば 10 ～ 20 ぐらいあります。

そのようなことで、いま取り組んでいる次第です。

ちょっと早足で見てしまいましたけれどもこれにて終了させていただきます。

どうもご静聴ありがとうございました。

会長謝辞

今日は、貴重なお話をありがとうございました。実をいうと、どのようなお話をされるのかと興味津々でして、仏教の話だと思っていました。私は火災保険会社の社宅で４歳から育ちました。昔は釧路も結構火事の多い所で大火を何回も体験した記憶がございます。建物がコンクリートというのはそういう意味があったのだと感じました。本当に貴重なお話しをありがとうございました。